１遠くの声に耳を澄ませて（宮下奈都）

―客足が途絶えることのない近所のパン屋で、一度だけパン教室が開かれたことがある。……

　参加者は女性ばかり十五、六人だった。パンを焼くのがまったく初めてなのは、驚いたことに私ひとりだったようだ。みんな、家でパンなんか焼くんだろうか？　①いつ？　②なんのために？　聞いてみたい。聞いてみたい、と思いながら、に取った小麦を延々とかきまわし続けた。こうやってスマを取り除くのだそうだ。休みなく粉をかきまわすうちに（　Ａ　）は赤くなり、（　Ｂ　）にはうっすらと汗をかいていた。ふと顔を上げると、台の端で店の主人が黙々と小麦をい続けている。無骨な求道者のようにも見えた。

　想像していた優雅な教室とは違い、課される作業はひたすら地道で厳しかった。しかも、主人がいちばん熱心なのだ。（　Ｃ　）を休めるわけにもいかなかった。いくつかの班に分かれてけっこうな重労働に励んでいたせいで、別のグループの人とは言葉を交わす機会もないほどだった。だから、実習中の陽子ちゃんの様子を私は見ていない。見ておきたかったな、と思う。柔らかな（　Ｄ　）を白い頭巾に包んで［　Ⅰ　］不乱に粉をこねていたんだろう。

　教室の終わりに、焼けたパンを試食してひとりずつ感想を述べた。私は③へとへとだった。パンはたしかにおいしかった。イベントとしては成功かもしれない。しかし、④あの工程を思うととてももう一度自分で焼く気にはなれなかった。

　楽しかったです、おいしかったです、⑤お店のパンが自分でも焼けるなんて感動しました―参加者たちが順々に⑥つるつるした感想を述べていき、いよいよ私は戸惑った。楽しいというなら、のんびり映画でもているほうが楽しい。おいしかったけれど、窯から出したばかりで、しかも目が入って三割増にはなっている。だいたい、手取り（　Ｅ　）取り教えられてなんとか焼き上がったのだ。余裕のある感想などまるで出てこなかった。

　「私は自分では決して焼かないことにしました。この店でずっと買い続けます。」

　とした声でそう宣言した人がいた。まったく同じ気持ちだったから、私はうつむいていた（　Ｆ　）を上げて発言者の顔を見た。髪の長い、かわいい女の子だ。それが陽子ちゃんだった。

＊語注

＊フスマ…小麦粉にまじる皮の。

問１　（　）Ａ～Ｆに入ることばをそれぞれ次から選び、記号で答えよ。（同じことばは二度使わない。）

ア　目　　イ　髪　　ウ　額

エ　足　　オ　　　カ　手

Ａ＝（　　　）　　Ｂ＝（　　　）　　Ｃ＝（　　　）

Ｄ＝（　　　）　　Ｅ＝（　　　）　　Ｆ＝（　　　）

問２　――線部①・②の後に省略されている同じことばを文中から抜き出して答えよ。

〔　　　　　 　　〕

問３　［　］Ⅰに入る漢字二字を次から選び、記号を○で囲め。

ア　一新　　イ　一進　　ウ　一心

問４　――線部③の説明として、最も適当なものを次から選び、記号を○で囲め。

ア　疲れきっていた

イ　落ち着かなかった

ウ　としていた

問５　――線部④についての感想が、端的に書かれている一文をここより前の文中から抜き出し、最初の五字を答えよ。

〔　　 　　　　〕

問６　――線部⑤について、「私」も「客足が途絶えることのない」パン屋だけのことはある、と実感したことがわかる一文を文中から抜き出し、最初の五字を答えよ。

〔　　 　　　　〕

問７　――線部⑥について、参加者たちの感想を「私」はどう感じているか。最も適当なものを次から選び、記号を○で囲め。

ア　型破りなもの

イ　その場にふさわしくないもの

ウ　あたりさわりのないもの

【解答】

問１　Ａ＝オ　Ｂ＝ウ　Ｃ＝カ　Ｄ＝イ　Ｅ＝エ　Ｆ＝ア

問２　（家で）パンなんか焼くんだろうか

問３　ウ

問４　ア

問５　想像してい

問６　パンはたし

問７　ウ

ポイント

問１　Ｅの「手取り足取り」は「懇切丁寧に教える」意の慣用句。

問３　「一心不乱」は「一つのことに集中して、心を乱さない」状態をいう。

問７　「つるつるした」は、なめらかに滑るときの形容。抵抗感はないものの、中身は乏しい。